

機関番号：17201

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2008～2010

課題番号：20530136

研究課題名(和文) 朝鮮分断の構造形成に関する研究(1950～1960年)

研究課題名(英文) A Study on the Structural Formation of Korean Division (1950-1960)

研究代表者

森 善宣(MORI YOSHINOBU)

佐賀大学・文化教育学部・准教授

研究者番号：80270156

研究成果の概要(和文)：本研究の結果、朝鮮半島では朝鮮戦争を通じて安保が最優先課題となる中、韓国で反共主義イデオロギーによる政敵の駆逐、北朝鮮では「米帝国主義のスパイ」、「反革命分子」等の罪名を被せた政敵の粛清と為政者に対する個人崇拝により、それぞれ国内統治を行うようになる経緯が判明した。南北朝鮮は、それぞれ為政者の執政のため軍事分界線の向こうにいる敵対勢力と各国内の政敵を同一視することにより、分断と対立を統治構造に組み込む相似形の分断構造を形成したことが、今回の研究で跡付けられたのである。

研究成果の概要(英文)：This study proved that each Korea became formed the almost same political structure that the division and the contradiction were built in each domestic politics through the Korean War which made a national security as the first issue in both sides. Possible political rivals against the dictator in each nation were cleaned up by the ideology of anti-Communism in South Korea on the one hand and by the purges on a charge of the “spy of American Imperialism” or the “anti-revolutionary activist” within the individual worship of its dictator in North Korea on the other hand.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	1,200,000	360,000	1,560,000
2009年度	1,200,000	360,000	1,560,000
2010年度	800,000	240,000	1,040,000
年度			
年度			
総計	3,200,000	960,000	4,160,000

研究分野：政治学

科研費の分科・細目：国際関係

キーワード：金日成、朴憲永、李承晩、朝鮮戦争、粛清、個人崇拝、スターリン、毛沢東

1. 研究開始当初の背景

(1) 平成20年度の開始時点ではA. ランコフ、下斗米伸夫などの業績があったが、朝鮮半島の分断構造の総合的な解明は、少なくとも日本では進んでいなかった。

(2) 朝鮮戦争の総合的研究を終えていた当時、中国やロシアの資料収集を中心にして、次の課題として分断構造の形成とその変容についての研究が、北朝鮮の崩壊を視野に入

れると急務と考えられた。

2. 研究の目的

(1) 朝鮮戦争を通じて形成された朝鮮半島の「対立の相互依存」構造は、北朝鮮の歴史偽造にも妨害されて形成過程が不明のままだった。この形成過程を歴史的に明かすことが、この研究の主要な目的である。

(2) 同時に形成過程から直接に来る構造の

特性と機能を解明し、2000年6月に明らかになった構造変容の内的要因を探し出すことも、研究目的の副次的な目的である。

3. 研究の方法

(1) 朝鮮戦争時期から1950年代までの米・中・露・韓にある各資料を調査、収集して、朝鮮分断の構造形成を歴史的に跡付ける方法を取った。この時、(イ)国際関係レベル、(ロ)南北朝鮮間の関係レベル、(ハ)南北朝鮮の経済発展レベル、(ニ)南北朝鮮それぞれの国内政治レベル、という4つのレベルを設定し、このうち(ニ)に軸足を置きながらも、各レベルの相互作用を探る方法を採用した。

(2) 当時から知られていた北朝鮮から米国、ロシア、中国などへ亡命した政府高官にインタビューする方法も併用した。具体的には、いわゆる「8月宗派事件」で中国へ亡命した延安派の重鎮たちに接触、取材することが企画された。

4. 研究成果

(1) 一方の韓国については、1945年末から46年初めに起きた信託統治紛争の渦中で形成された、旧ソ連による朝鮮半島全体に対する支配に反対すべしとする反共主義イデオロギーが、朝鮮戦争を通じて北朝鮮が行った虐殺と蛮行により韓国民には真実と受け止められた。李承晩は、このイデオロギーを用いて国内における政敵、例えば戦前に転向していた農業相の曹奉岩を1956年に粛清する等、国内統治において政敵を「アカ」つまり共産主義者とレッテル張りして虚勢、逮捕、甚だしくは肉体的に除去する独裁政治を継続できるようになった。この政治スタイルは、李承晩後にクー・デタを起こす朴正熙でも、全く同様に継承される。

のみならず国際関係にあっても彼は、ベトナム戦争への韓国軍の派遣を米国に繰り返して打診する、反共連帯の名目でアジア・太平洋地域の各国に反共同盟の形成を呼びかける等、反共主義を旗印と外交政策を進めた。この米国との反共を旗印とする同盟関係の形成過程を背景として、長崎大村収容所での在日朝鮮人処分問題が起こると前後して、彼は李承晩ライン宣言と日本漁船拿捕、久保田発言を契機とする対日国交正常化交渉の中断など対日強硬策を採用できたのである。

この在日朝鮮人処分問題は、日本と北朝鮮との間で1959年に開始される在日朝鮮人帰還事業の起点となる。予期しなかった成果ながら、研究の副産物として帰還事業の実現に北朝鮮はもちろん米国、韓国、日本それぞれが各国の思惑と国益を織り交ぜて早くから関わっていた事実が判明した。この部分は未整理ながら、今後の研究課題として取り組み、

別途の研究業績として研究書を出版したい。

(2) 他方の北朝鮮に関しては、朝鮮戦争の開戦決定過程において金日成と朴憲永が各人の思惑から暗闘を展開したところに始まり、朝鮮戦争中に二人の対立が戦争責任の所在をめぐって表面化した。金日成は自分が戦争責任を負うことから何とか脱したものの、中国人民志願軍が参戦して中朝連合司令部が形成され、戦争をスターリン-毛沢東-彭徳懐というラインで指揮するようになると、朝鮮人民軍最高司令官と軍事委員会委員長という役職が有名無実化すると同時に、また1951年7月に停戦会談が開始されると、早晩その責任論が再燃することが予見された。

その反面で朴憲永は、米軍の仁川上陸作戦が成功して朝鮮人民軍が総崩れになると、それまで軍内部に組織が禁じられていた朝鮮労働党細胞組織を統括する党政治局長に就任、事実上その実権を掌握したのである。従来は注目されなかった党政治局長の役割は、軍内の党組織を通じて軍を動かすことができるという意味で、朴憲永が戦後に処刑される罪名となる政府転覆陰謀を実際に起こしうる立場を彼に与えたと言える。

ここから金日成は、朴憲永が率いる国内派と言われる共産勢力の行動を恐れ、その粛清を決意したと考えられる。金日成は1952年春から朴憲永はじめ国内派幹部の行動を監視し始め、翌53年にスターリンが死去して停戦協定が調印される段階に至ると、朴憲永らを逮捕、党籍を剥奪して裁判に回付する挙に出た。もちろん、その「米帝国主義のスパイ」などという罪名はデッチ上げた証拠に乏しい濡れ衣だったが、朴憲永は中国とソ連からの救命要請にもかかわらず、1956年8月31日に金日成の命令を受けた方学世により秘密裏のうちに虐殺されたことがロシア資料により判明した。

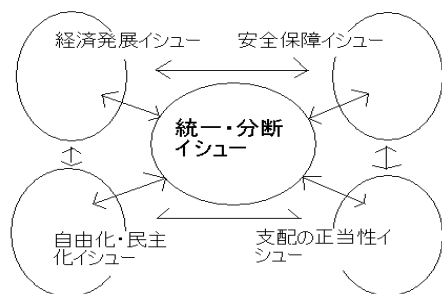
金日成は、国内派の粛清と前後して党内の批判・反批判運動を展開させると同時に、自らに対する個人崇拜を段階的に推進させた。これは、金日成が毛沢東に率直に吐露したとおり、朴憲永のような大物を粛清するには余りにも証拠がなく、その実行には批判をかわすため指導者への盲目的な追従が不可欠だったからである。したがって、スターリン批判後に会談した毛沢東とミコヤンは、朴憲永の粛清など金日成の行動を痛烈に批判し、それを「開明していない君主」のそれに比喻するほどだった。

こうして中ソからの訪朝団が金日成に行動の是正を求めたけれども、金日成は是正の約束を反故にただけでなく、スターリン批判のような個人崇拜が朴憲永にあったと自らの偶像化を否定した。幸か不幸か金日成は、スターリン批判後に東欧で起こる反ソ運動をフルシチョフが暴力的に弾圧したこと、中

ソ間でいわゆる中ソ論争が起こって中ソの連携は崩れたこと等の国際環境の変化を受けて、中ソからの批判が和らいだ中で粛清を継続しながら個人崇拜を深化させて、1961年に開かれた党大会で個人独裁を完成させ得たのである。

(3) このように南北朝鮮で進展した事態の結果、韓国と北朝鮮では相似形の分断構造が定着したことが判明した。すなわち、どちらも軍事境界線の向こうにいる実際の敵対勢力と各国内にいる自らの政敵とを結び付け、国外追放を含めて政敵を排除して、各国内における独裁政権の確立に成功した。韓国では政治分野での「アカ」という非難は社会分野へ拡散して行き、現在に至るまで相手を叩き落とす最有力な口実になっている。北朝鮮でも米韓と結び付く「反革命分子」や「反動分子」とされた者は収容所へ送られると同時に、指導者への忠誠が極限に達しており、住民の中に潜む社会安全部の要員が常に一般住民を監視する警察統治が徹底している。

この分断構造は、東西冷戦が継続する間は比較的安定すると共に上手く機能したと言える。この構造では統一・分断イシューを媒介として安全保障が最も重要なイシューだとされ、そのためには経済発展、自由化・民主化と基本的人権の保障、支配の正当性問題などは二の次と国民に考えさせることができた。したがって、悪いのは全て軍事境界線の向こうにいる敵対勢力であり、韓国にとっては共産主義諸国が、北朝鮮にとっては自由主義諸国が分断と対立をもたらしていると各国民には説明され得た。



(各イシューの関係概念図)

しかしながら研究代表者は、この分断構造の中に2000年6月の南北首脳会談で誰の目にも明らかになる「和解と協力」の基盤が潜んでいたことを突き止めた。研究代表者が「対立の相互依存 (Mutual Dependence on/in Antagonism)」と命名する朝鮮半島の分断構造にあっては、米中和解の折に1972年7月に南北共同声明が出されて事実上、南北朝鮮が互いを認知したように、もともと敵対勢力の存在が組み込まれていた。要するに、敵対勢力を内政の引き締めだけでなく戦争の再

発危険性やその防止策を口実に外交にも利用していた統治形態においては、対立を止めて互いに握手するか否かは、為政者の政治的決断に負うところが大きかったと言える。

ここから分かるのは、分断構造を正方向に動かす (strait mode drive) 場合、反国家の韓国は北朝鮮と敵対する外はないのに対し、反共主義イデオロギーにより弾圧された人権の回復や自由化・民主化を口実に「反『反共』」という逆方向へ動かす (reverse mode drive) と、金大中が開始して盧武鉉に引き継がれた包容政策が現れる。この包容政策は、その開始からして韓国による北朝鮮と分断の管理を目的としており、北朝鮮が受け入れる限りにおいてのみ機能するのだった。

現在の李明博政権の下で、見事に包容政策の可逆性と構造的イデオロギー性が暴露され、また彼の北朝鮮「封じ込め」政策が北朝鮮による核やミサイルの開発しかもたらさなかった経緯から、包容政策の構造機能的な限界は次期韓国政権により見直されつつも、修正版の包容政策が取られる外はなからう。この意味で「対立の相互依存」構造と「協力的な分断 (Co-operative Disunion)」構造とは、その属性において構造から発現する2つの互換可能な形態と位置付けることができ、これまでの研究で理解し難かった南北朝鮮の対立と和解の本質に迫ったと自負するものである。

(4) この他に今回の研究推進過程で判明したのは、北朝鮮を取り巻く周辺諸国、とりわけ中国、ロシア、旧東欧諸国には冷戦時代の外交電文や関連資料が豊富に眠っているという事実である。研究代表者は2010年度までの研究成果を踏まえ、この3年間の研究成果を現在執筆中の第二冊目の研究書『朴憲永と現代朝鮮政治：「対立の相互依存」構造の形成過程に関する研究』にまとめて出版する。

これと同時に2011年度からの科研費課題として、このような北朝鮮関連の政治外交資料を収集、整理、編集、翻訳して日本で出版する作業に取り組む所存である。そして、先述した朝鮮分断の構造変容が具体的にどのような起きたのかを、これら北朝鮮関連の政治外交資料を基に解き明かし、第三冊目の研究書へ繋げていくことになる。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計10件)

- ① 森善宣、朝鮮半島の新情勢と展望：平和的な分断構造解体の道を探る、平和文化研究、長崎総合科学大学長崎平和文化研究所、第30/31併号、査読無、2010、pp.115-125.

- ② 森 善宣、北東アジアの行方：朝鮮半島情勢を中心に、リプレーザ、創刊号、リプレーザ社、査読無、2010、pp.18-26.
- ③ 森 善宣、強盛大国に砲門を開いた北朝鮮：善いは悪いで、悪いは善いの半島情勢を読み解く、インターネット・サイト「ちきゅう座」、査読有、2011.01.08。
- ④ 森 善宣、親ノ血ヲ引ク兄弟ヨリモ：家族独裁体制の崩壊後、北朝鮮は中国の植民地と化す、同上、査読有、2010.10.05。
- ⑤ 森 善宣、犬死にせし者たちの嗚咽は朝鮮半島に平和を求める、同上、査読有、2010.05.17。
- ⑥ 森 善宣、盧武鉉前韓国大統領の死と「弱衰小国」の「花もたせ」外交、同上、査読有、2009.06.22。
- ⑦ 森 善宣、金正男は「光明星 2 号」に乗ってワシントンへ飛べ！、同上、査読有、2009.03.31。
- ⑧ 森 善宣、朝鮮半島 2009——テポドンの飛ぶ日、同上、査読有、2008.10.15。
- ⑨ 森 善宣、韓国民族主義の試練：民主主義の韓国的発展に見る課題と展望、同上、査読有、2008.07.18。
- ⑩ 森 善宣、韓国「実用主義」外交の明暗：「和解と協力」から「相互主義的な分断」へ、同上、査読有、2008.05.02-04（3回連載）。

〔学会発表〕（計 6 件）

- ① 森 善宣、強盛大国へ砲門を開いた北朝鮮：「善いは悪いで、悪いは善い」の半島情勢を読み解く、スラブ研究センター「北朝鮮をめぐる境界の政治」、2011.03.13、北海道大学スラブ研究センター（札幌市）。
- ② 森 善宣、総田芳憲、木村貴、北朝鮮情勢を斬る！、東アジア学会定例研究会（政治部会）、2010.10.16、西南学院大学（福岡市）。
- ③ 森 善宣、北朝鮮の金ジョンウン：北朝鮮の後継者になれるのか？、東アジア学会・ビジョンと連帯 21 合同研究会、2009.11.31、西南学院大学（福岡）。
- ④ 森 善宣、朝鮮半島の新情勢と展望：平和的な分断構造解体の道を探る、日本平和学会九州沖縄地区平和研究集会、2009.11.14、佐賀大学大学会館（佐賀）。
- ⑤ 森 善宣、粛清と独裁：金日成の実権掌握過程、韓国政治学会、2009.08.21、インターコンチネンタル・ソウル（ソウル）。
- ⑥ 森 善宣、日本政府の韓国認識と韓国政府のベトナム認識：韓国とベトナムふたつの戦争を通じてみた相互認識の比較研究（韓国語）、The 9th Pacific-Asia Conference on Korean Studies、2008.11.26、Vietnam Trade Union Hot-el (Hanoi)。

〔図書〕（計 2 件）

- ① 森 善宣、韓国大統領の政治イデオロギー比較分析：李承晩と金大中大統領を中心に（韓国語）、韓国国家管理と大統領のリーダーシップ形成と哲学 I（韓国語）、延世大学校国家管理研究院叢書、第 7 巻、査読有、2010、pp.211-241.
- ② 朴 明林著・森 善宣監訳、戦争と平和：朝鮮半島 1950、社会評論社、査読関係なし、2009、全 p.679.

6. 研究組織

(1) 研究代表者

森 善宣 (MORI YOSHINOBU)
佐賀大学・文化教育学部・准教授
研究者番号：80270156

(2) 研究分担者 なし

(3) 連携研究者 なし